

# 淨土論に於ける二乗種不生に就て

西尾 京雄

## 一、ばしがき

婆藪槃豆菩薩の無量壽經優波提舍、願生偈は二十四偈より成り、安樂世界を觀じて阿彌陀佛を見奉り、彼の國土に願生することを説いたものである。この中、彼の佛の國土の功德の莊嚴を觀察するに十七種の事があり、その第十六は大義門功德の成就を説き明したものである。

①大乘善根界、等無譏嫌名

女人及根缺、二乗種不生

と偈にあり、論には之を註解して、

②淨土果報、離二種譏嫌過、應知、一者體、二者名、

體有三種、一者二乘人、二者女人、三者諸根不具人、無此三過故、名離體譏嫌、名亦有三種、非但無三體、乃至不聞二乘、女人、諸根不具三種故、名離名譏嫌、等者、平等一相故。

とある。

その大義門功德成就といふに就て曇鸞の論註には「門<sup>③</sup>とは大義に通ずるの門なり、大義とは大乗の所以なり、人は城を造るに門を得て則ち入るが如し、若し人、安樂に生ずることを得れば是れ則ち大乗の門を成就するなり」とあり、大乗の善根界である安樂淨土の土は三種の譏嫌の名・體なく純一無雜であつて皆同一味である。報國の中は悉く丈夫人にして諸根具足し大慈悲を具し、平等一味であつて同一大乘であるといふのである。

今、是等の二乘人、女人及び諸根不具人の三種の中、二乘人を中心の問題にするのであるが、論註の説くが如くであるならば、我々淨土教徒が常に拜讀する康僧鎧譯、實は覺賢譯、無量壽經を始めとして、諸種の經論には安樂世界には聲聞無數であることを説いてゐるが、この矛盾を如何に理解すべきであらうか。

之を解釋するに就て、曇鸞・淨影・善導等の古來の支那諸宗の宗師の解釋の方法と、今、一つは是等の説を考慮することなく、近世の佛敎經典史家の經典史の立場から批判的に理解するものがある。

後者の立場からすれば、多くの場合、傳統的解釋が一顧も與へられないため、宗義の破壊に導くことが多い。今、余は從來の新解釋と、傳統の解釋も深く注意してその解釋の推移を研しつゝ、淨

土論の思想背景に力點を置いて考察を進めやうと思ふ。

## 二、經典史より見たる解釋

安樂世界の僧伽の叙述ある諸經論を見れば、其處に矛盾する様な説相が見られるのでその淨土思想の發展を見様とするのである。この事は誰もが留意して研究すべきものであることは異存はないのであるが、又、速急に斷定し得ない種々困難な問題にも逢着することが多いものである。

先づ、大無量壽經の説相を見るに、法藏比丘の四十八願の中、第十四願には、

<sup>④</sup>設我得佛、國中聲聞、有能計量、乃至三千大千世界、聲聞緣覺、於百千劫、悉共計校、知其數者不取正覺。

といひ、その成就文には、

<sup>⑤</sup>又、聲聞、菩薩、其數難量、不可稱說、神智洞達、威力自在、能於掌中、持一切世界、佛語阿難彼佛初會聲聞衆數、不可稱計、菩薩亦然。

とあり、聲聞の衆は不可稱計とあり、菩薩も亦然なりといふ敘述になつてゐる。

<sup>⑥</sup>復、十住毘婆沙論、卷第五、易行品の彌陀讚には

超出三界獄 目如蓮華葉

聲聞衆無量 是故稽首體

淨土論に於ける二乘種不生に就て

とある。

又、<sup>⑦</sup> 智度論、卷第三四には、

有佛、爲一乘說法、純以菩薩爲僧。有佛、聲聞、菩薩、雜以爲僧、如阿彌陀佛國、菩薩僧多聲聞少。

といつてゐる。龍樹菩薩の拜誦せられし無量壽經は如何なる經本であつたか、的確に知り得ない憾みがあるが、この論文より窺へば、その安樂國の僧衆について菩薩僧多く、聲聞僧少しといはるゝものであつたものと思はれる。即ち、十住論、無量壽經等の僧衆よりも稍、大乘的色彩の濃厚のものであることが知られ得る。

更に復、悲華經に於ては總じて阿彌陀佛の本願を五十一數へられるが、その第四十三願には、<sup>⑧</sup> 令我世界、無有聲聞、辟支佛乘、所有大衆、純諸菩薩、無量無邊、無能數者、除一切智、

とあり、又、是等の誓願の説き終りし時、尊音王如來 (Indraghoṣasvarājā) の尊善無垢 (Atikāmya-indrasuvirājita) 世界 (iṅśā) 、

<sup>⑨</sup> 彼界、無有聲聞、辟支佛名、亦無有說小乘法者、純一大乘、清淨無雜、其中衆生、等一化生、亦無女人及其名字、彼佛世界所有功德、清淨莊嚴、悉如大王所願。

と説いてゐるが、無諍念王 (即ち阿彌陀佛の本生王) の安樂世界も亦是と等しい莊嚴であると説いて

ある。

即ち、悲華經に來ると、智度論の菩薩僧衆多く、聲聞僧衆少しといふが、聲聞、緣覺の二乘あることなく、純一大乘であるとその大乘的精神が高潮に達してゐるを見るのである。

是等、無量壽經、十住論、智論、悲華經等の諸經論を見る時に、そこに思想の發展の推移を容認せねばならぬものゝ如くである。

扱て是等の敘述より進んで、更に悲華經を考察すると、悲華經では女人(Nari)不生、根缺(Indriyavalkalya; pali, indriyavekalata, indriyavekalyata)不生、二乘不生といふことを一一本願に誓つてゐるのであるが、無量壽經にはその如き願文は見當らない。それ故に、天親菩薩の願生偈はこの悲華經の如きを依用して造られたものであらうと推定するのである。今、悲華經の願文と願生偈とを對照すれば、

願生偈

悲華經<sup>⑩</sup>

無譏嫌名

無不善名(第十五願)

女人不生

無有女人(第十二願)

根缺不生

人敬根淨(第二十九願)

二乘不生

無有二乘(第四十三願)

淨土論に於ける二乘種不生に就て

となつて全く照合することゝなる。この中、無不善名を除いて餘の無有女人、と人敬根淨（自國の衆生の根具足）と無有二乘等は悲華經獨自のものである。

こゝに於て、天親菩薩、御所覽の無量壽經は悲華經所説の誓願をもつ經であつたものであると想定するのである。正直の所、この説は曾つて余も亦悲華經國譯の解題に於て採用したものである。是等、諸經論の諸説は互に影響をし思想の發展も爲したであらう。然し、天親菩薩の願生偈が直接悲華經が對象となつたものであるか否かはしばらく躊躇せねばならない様である。

それ故に先づ其等思想の根源に遡り、龍樹菩薩の智度論等に現はるゝ阿彌陀佛の安樂世界の概念は如何なるものであるかを吟味して見やうと思ふ。

又、二乘種不生といふ根本の意味はどう理解すべきか、それ等については支那の諸學匠は如何に考へてゐたか、我等衆生の往生すべき安樂世界について理解を深めやうと思ふ。

### 三、二乘種不生の語義について

支那に於ける佛教諸宗の諸龍象が如何に解釋したかはしばらく止め、淨土論を譯出した菩提流支の譯語例によつて、その原典が如何にあつたかを想定せねばならない。余は試みとして次の如く梵文に還元しやうと思ふ。

この一句の梵文の偈形の吟味の當否は別として先づ大體認容し得らるゝことと思ふ。

二乘とは *dvi-yāna* であつて聲聞 *śrāvaka* (乘) と緣覺 *pratyekabuddha* (乘) のことであることは異論はあるまい。

種とは *gotra* (Pali, *gotā*; Tib. *rigs*) をその梵語とするものであらう。果して然らば淨影・天台等の種性の意にとるものであつて、宗學上に於ての語義の解釋と違するけれども、是等の文を率直に讀む時には誰もが首肯せねばならぬことと思ふ。

然らば、菩提流支の譯語例に徴し、果又、舊譯經論の例として妥當か否か一應研して見やう。楞伽經には菩提流支の十卷楞伽、求那跋陀羅の四卷楞伽、實叉難陀の七卷楞伽あり、梵本も現存してゐるからその譯語例を對照して見やう。

(一) 梵文入楞伽經(頁六三)

十卷(大・二六・五二六・下) 七卷(五九七・中) 四卷(四八六・上)

*Śrāvaka yānābhisamayā-gotra*

聲聞乘性證法

聲聞乘種性

聲聞乘無間種性

*Pratyekabuddhayānābhisamayā-gotra*

辟支佛乘性證法

緣覺乘種性

緣覺乘無間種性

*Tathāyatayānābhisamayā-gotra*

如來乘性證法

如來乘種性

如來乘無間種性

*Aniyatakatara-gotra*

不定乘性證法

不定種性

不定種性

*A-gotra*

無性證法

無種性

各別種性

淨土論に於ける二乘種不生に就て

六八七

九九

(一) 梵文 (一〇七頁)

十卷(大・一六・五三五) 七卷(六〇三・中) 四卷(四九三・中)

Ārya-gotra

聖人性

聖種性

聖種性

Balaprthagjana-gotra

凡夫性

凡夫種性

愚夫種性

(二) 梵文 (三一八頁)(四一九頁)

十卷(大・一六・五七五・中)(四三三・偈) 七卷(六三二・上)(三九二・偈)

Gotra-tathāgata

如來性

如來種性

右の三種の譯語例を見れば Gotra の語は菩提流支にあつては全ての場合に「性」と譯し、求那跋陀羅、實叉難陀等は「種性」と翻譯してゐる。この譯語例は菩提流支譯、深密解脫經、卷二(大・一六・六七二・下)に聲聞性衆生、緣覺性衆生、佛乘性衆生、と譯し、玄奘の解深密經、卷二(大・一六・六九五・上)には聲聞乘種性有情、獨覺乘種性有情、如來乘種性有情と譯してゐるを見る。よつて菩提流支にあつては Gotra の語は性と譯すものであることを知り得るのである。

次に菩提流支が種と譯す梵語を見ると次の如きものが得られる。

(一) 梵文 (一九五頁)

十卷(大・一六・五五一・下) 七卷(六一六・上) 四卷(五〇六・下)

Saddharmaparigrahāca mahamate

攝受法藏者

若能攝受一切正法

攝受正法者

buddhavarānisśyānupaocchedaḥ pito bhavati.

卽不斷佛種

則不斷佛種

則佛種不斷

(二) 梵文 (二二二頁)



Aṣṭaṅgāni mahāmāte nirvāṇāni śrāvakapratyekabuddha bodhisatvānāni bodhisatvāśca samādhibuddhāirvidhāryante tasmātsamākṛisuphāt yena na parinirvānti. aparipūrṇatvāt-tathāgata bhūmeḥ sarvakāryapratiprasambhāṇāni ca syādyadi na saindhāryet-tathāgatataḥkavānīśochedasāca syādacintyabuddhamāhātṛṇyāni ca deśāyanti te buddhā bhagavantaḥ. ato na parinirvānti.

十卷(六・一六・五五・上)

大慧、於八地中、一切菩薩、聲聞、辟支佛入涅槃想、大慧、諸菩薩摩訶薩、承己自心三昧佛力、不入三昧樂門、墮涅槃而住、以不滿足如來地故、若彼菩薩住三昧分者、休息、度脫一切衆生、斷如來種、滅如來家、爲示如來不可思議諸境界故、是故不入涅槃。

七卷(六一・八・中・下)

大慧、八地菩薩所謂三昧、同諸聲聞、緣覺涅槃、以諸佛力、所加持故、於三昧門不入涅槃、若不持者便不化度一切衆生、不能滿足如來之地、亦則斷絕、如來種性、是故諸佛爲說如來不可思議大功德、令其究竟不入涅槃。

四卷(五〇・九・中)

大慧、八地菩薩摩訶薩、聲聞、緣覺涅槃、菩薩者三昧覺所持、是故三昧門樂不般涅槃、若不持者如來地不滿足、棄捨一切爲衆生事、佛種則斷、諸佛世尊、爲示不可思議無量功德。

淨土論に於ける二乘種不生に就て

右の對照によりて知らるゝ如く、(一)に於ては Buddha-Vaiśā に就て、菩提流支、實叉難陀、求那跋陀羅等は例外なく佛種と譯し、その種の名語は Vaiśā といはれる。

(二)に就て Tathāgata-kula-Vaiśā を菩提流支は如來の種 Tathāgata-vaiśā 如來の家 Tathāgata-kula、との二つに分つて譯してゐる。勿論、菩提流支の原本にあつては二語に分れてゐたものであるかも知れぬ。實叉難陀にあつては如來の種性、と譯し、求那跋陀羅は佛種と譯して Kula-Vaiśā の二語を同義語として種性、種と譯したものであらう。

次に菩提流支譯の遮食肉品、第十六には、食肉の人は大慈種を斷つとか、若し食肉すれば當に知るべし、即ち、是の衆生の大怨は我が聖種を斷つとか、是の佛、如來は慈心の種とか或は如來種、旃陀羅種等の語あるも、實叉難陀、求那跋陀羅、梵本等と文の廣略があるばかりでなく、文相が異なるので確實に知り得ない憾みがある。この中、聖種といふのは Ārya-gotra 或は Ārya-vaiśā であるかもしれぬ。それ故に、如來種とは同じく Tathāgata-gotra 或は Tathāgata-vaiśā であらうし、旃陀羅種といふのは Candala-kula に相違ないであらう。

總じて、(gotra, Vaiśā, Kula) の三語は同義語として使用せられる語であつて西藏語では一様に gos の語で翻譯せられ、漢譯では通じては種の語で譯されてゐる様である。この場合に種子の意あることは勿論であるが種族の意味で以て理解すべきものであることを忘れてはならぬ。

Kula は家と譯されるものであつて、王家 *ksatriya-kula*、婆羅門家 *brāhmaṇa-kula*、等と用ひられ、この王家に於て釋迦族についていへば、佛、曾つて、頻婆沙羅王にその種姓を問はれ、種族 *gotta* に依れば曰 *Adicca*、姓 *jaṇi* に依れば *sakīya* と答へ給ふたことが *sutta-nipāta*. III. I. (v. 422) に出てゐる。こゝでは日種を *Adicca gotta* としてゐるが、楞伽經(梵文)第七九九偈には月種と菩提流支等が譯してゐる(十卷、第八二五偈、大・一六・五八四・中)原語は *soma-vāṇisa* であることによりても知られる如く *gotta* と *vāṇisa* とは同義語として使用せられるものである。 *gotta* の語は是等の意味から轉用せられて證法 (*abhisamaya*) の衆を五種類に分類したものである。

以上の如く、(*gotra* (*pāli*, *gotta*, *Tib. rigs*)) の用語例、並に菩提流支の譯語例に徴して二乘種不生の種の原語は *gotra* であることは誰もが承認せねばならぬことと思ふ。

因に、羅什の智度論に依れば、經の「佛、告舍利佛、於汝意云何、菩薩摩訶薩、行般若波羅蜜、一日修智慧、心念我行、道慧益一切衆生……」に於てその利益の解釋に、

令衆生住於道中、是爲利益、聲聞種、辟支佛種、佛種。

とあり、是等の聲聞種、辟支佛種、佛種といふは *Srāvaka-gotra*、*Pratyekabuddha-gotra*、*Buddha-gotra* (*Tathāgata-gotra*) のそれに相應するものであることが知られやう、菩提流支の種といふと同一轍であることは當然と信ずる。因に種を直に種子と解する從來の宗學に於ての典據は起信論の分

別發越道相の條下（眞諦譯、大・一三二・五八〇・中）（實叉難陀譯、大・三三・五八八下）の信成就發心を述べる中に善根微少の衆生が久遠已來煩惱深厚の爲に佛に値ひ亦供養を得て然も人天の種子を起し或は二乗の種子を起す等と説かれてゐる用語の上からいはれたものゝ如くであるが、種は種子の意味を持つことは勿論であるが、今の場合は種をもつものゝ義である。種子等が問題になるのではなく、女人、根缺、二乘人の體及び名が問題であることを銘記せねばならない。

次に不生とは *na upapadyate* の語を依用したのは魏譯、大無量壽經の第十八願、唐譯、無量壽經如來會の第二十願等の若不生者と譯するを、梵文、第十九願の願文に對照して得たものである。この不生に就て、曇鸞の論註を繼承する宗學者は往生を許容して始起の義を遮するのであると説明してゐる。

この解釋は深く宗教的意義を現はしてゐるものと思はれるが文の當相としては親しいとは思はれぬ。こゝでは「往生しない」の義である。

されば、二乗種不生とは、二乗の種性のものは淨土に生れない、といふ意味であつて二乗の種子或は二乗の心の生起を云々する偈句ではないことを知らねばならない。

前述せる經典史家の解釋も亦、かく偈句を率直に理解したものであるが、支那に於てもかく解したたものもあり、安樂淨土を凡聖同居土の應土とする聖道諸師の中にあつて報土との判を爲すものあ

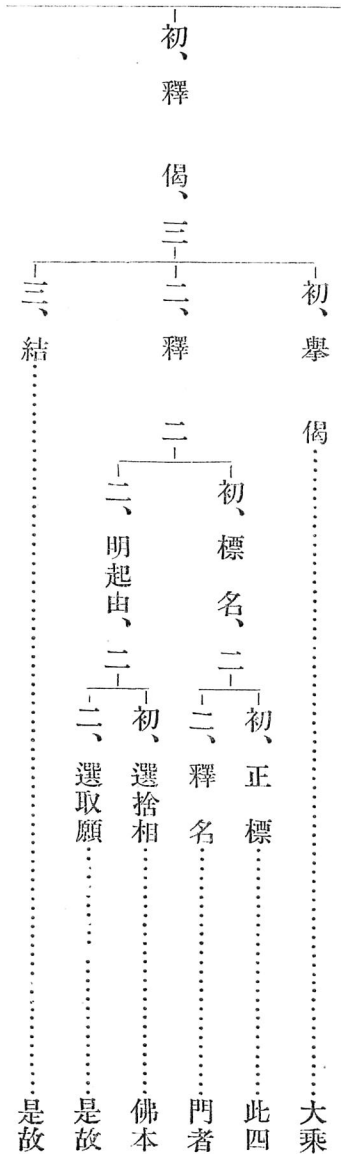
るは此の淨土論の偈句をかくの如く見て、二乗の聖者でさへも往生が出来ない。況んや凡夫の往生の出来ないことは當然であるから報土であると主張するのである。

果して右の如く、二乗種不生を解釋しては凡夫と聖者とが等しく往生するを淨土教の特異の教義としてゐるのであるから大無量壽經と論との矛盾を如何に解釋し得られるのであらうか。それに入るに先つて傳統的解釋を一顧しやう。

#### 四、支那に於ける諸師の解釋

先づ、第一に淨土論註について曇鸞の解釋を見ることゝしやう、それには顯深義記によつて科文を示し正しく要點に就て概説しやう。

#### 第十六大義門功德、二



淨土論に於ける二乗種不生に就て

二、問答決疑、三

初、會經論、二

初、問相違相、二

二、答 五

初、舉經論、四 初大經、二、十  
住論、三、智論 問曰

二、正問相違…… 聲聞

初、明彼無二乘、二

初、略釋…… 答曰

二、引證…… 法華

二、示他方二乘來生、二

初、引經…… 法華

二、立理…… 嚴推

三、會有聲聞名、二

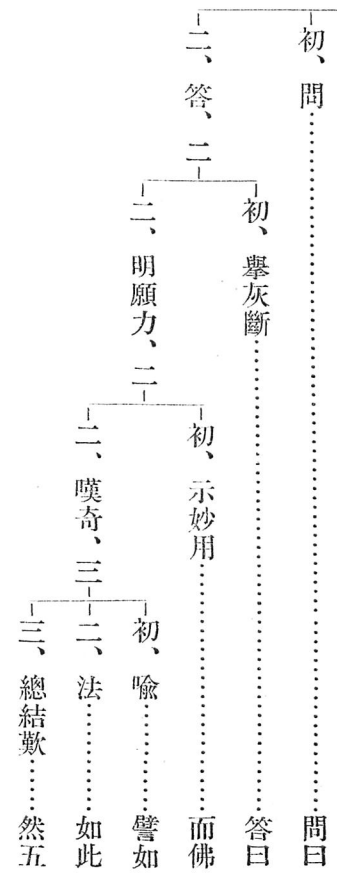
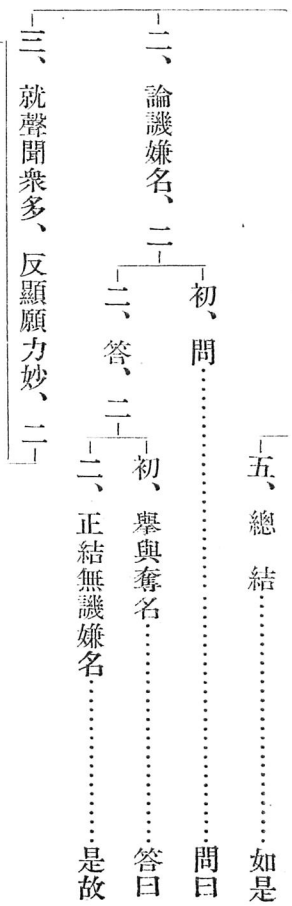
初、正會…… 如言

二、舉列…… 如天

四、明淨土無二乘根種、二

初、正明…… 又此

二、舉列…… 譬如



右の科文に於て二乗種不生に就て緊要なる個所は問答決疑の三の中、初の經論を會する條下である。

此處に於ては、初めに大經と十住論と智度論等に安樂世界には聲聞多しといひながら、何故に淨土論に二乗の名なしといふのであるか、と問を起し、その答として五をあげてゐる。

淨土論に於ける二乗種不生に就て

第一、明<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>一乘<sub>一</sub>、安樂淨土は理として本來、聲聞、緣覺の二乘はないものであるといふのである。即ち、病があるからその病に應ずる藥があるのである。病が無いのに而も藥があるといへば理に悖るではないか。その如く、釋迦牟尼佛は五濁世に出で給ふた。そこには衆生の機に漸頓有り、根に利鈍がある。従つて所修の法にもそれに應じて三乗の法があるわけである。三乗の機があると、いふのは五濁世であるからである。法華經に一を分つて三と説くのも此の界の五濁であるからである。然るに淨土は五濁でないから根機に利鈍の差別がない爲め三乗の別なく、一佛乘であることは自ら明と言はねばならぬといふのである。

第二、示<sub>ス</sub>他<sub>方</sub>、二乘來生<sub>ヲ</sub>、第一には安樂世界には聲聞、緣覺等の二乗のないことを説き已り、此處に來りて彌陀の淨土には他方より聲聞の來生することを成立するのである。即ち前に一言せる如く二乘種不生に於て不生とは往生といふを許して始起を遮遣するのが曇鸞の釋し方であることを注意すべきである。

この命題について曇鸞は先づ、法華經、譬喻品(大、九・二五・上―中)の

「爲滅諦故 修行於道 離諸苦縛 名得解脫」

是人於何 而得解脫 但離虛妄 名爲解脫

其實未得 一切解脫 佛說是人 未實滅度



斯人未得<sup>二</sup> 無上道故 我意不欲<sup>レ</sup> 令<sup>レ</sup>至滅度<sup>一</sup>  
我爲<sup>二</sup>法王<sup>一</sup> 就<sup>二</sup>法自在 安隱衆生<sup>一</sup> 故現<sup>二</sup>於世<sup>一</sup>

の諸頌を引證し、義理を詮顯してゐる。その意は阿羅漢の解脱といふのは諸大乘教にあつては眞實の解脱とはいはないのである。勝鬘經<sup>⑩</sup>には五住地の煩惱を立てるが、天台家の無明煩惱を界内の惑と界外の惑とに分つものゝ、前四住地は界内惑、第五無明住地は界外の煩惱に相應する。阿羅漢等の斷ずる見修二惑に於て三界の見惑は一にし、修惑は欲、色、無色の三界に分る、それ故見修の二惑は四となり、前四住地の煩惱と相應する。

是等の煩惱の對配より見れば、所謂、阿羅漢の證りといふものは眞實の解脱ではなく、四住地の煩惱の根本となる法性の理體に迷ふ無明住地の界外の惑が残存してゐるわけである。よつて分段生死は免れるけれども變易生死を受けるといふのが大乘一般の法相なのである。それ故に論註には法華經を引いて未だ一切の解脱を得ず、未だ無上道を得ざるを以つてあるといつてゐる。

然らば一切の解脱を得ざる阿羅漢は何處に生じてゐるものであらうか。この疑問について曇鸞は續いて法華經の化城喩品、並に智度論<sup>⑪</sup>の意によつて理を立て、居られる。その大意によれば、私の滅度の後に、聲聞の弟子あり、灰身滅者の者あり、其の者の爲に我は餘國に於て名をかへて出現しこの法華經を説いて一佛乘に入らしめんと説いてゐるに對し、智度論にはその餘國とは三界外の淨

土のことゝしてゐる。即ち、阿羅漢は界内の惑を盡してゐるから三界に生れることはないが、界外の惑ある爲に變易生死を受けねばならない。その界外とは淨土を外にして生處はない。無明住地を縁として無漏業を因として唯、淨土に來往するといふのである。その淨土といふは彌陀の淨土<sup>(10)</sup>であるといふのが鸞師の意である。

第三、會<sub>レ</sub>有聲聞名、阿彌陀佛の眞實報土に於ては他方來の聲聞は已に往生した時から菩薩であるべきであつて、そこに聲聞の位する餘地がないであらう。それに大經、十住論、智論等に聲聞ありといふは如何なる理由に由るのであるかと問ふ。

それに答へて、他方の聲聞の來生は本より菩薩であるが、それを本名に依つて聲聞といふのである。而して更に智度論第五六卷(大・二五・四五・上)の天帝釋を佛が人をしてその由來を知らしめん爲に人中に於いての名、憍尸迦を以てお呼び給ふたのと同類であると例證せられてゐる。

第四、明淨土無<sub>二</sub>乘根種、上來は大經及び十住論等に聲聞ありといふ意を説明し已つたから、こゝでは正しく、淨土論の論文について二乘種不生の義を説示せられるのである。

曇鸞にあつては二乘種の種<sub>ヲ</sub>種子<sub>ヲ</sub>(Bija, Tib. sa-don)と解し、隨つて不生を往生の義にとらずして生起の義にとつてゐる。それ故に、二乘種不生とは二乘の種子がはえぬといふ意味であるといひ論註には正しく、安樂國に二乘の種子は生えないといつてゐる。

而して出生を遮して往生を許すのであつて、次に直ちに、亦何ぞ二乗の來生を妨げむや、といつて二つの譬をあげてゐる。その一譬喩をあぐれば、江南の橘の根芽は江北には生えないけれども、その江南で出來た橘を江北に齎らすことの出來ない理由はない。則ち、江北の河洛の菓物店には橘があるではないか、と。その如く淨土には二乗の根芽(種子)は生えないが、他方の聲聞の來生には何の妨もないのであると主張するのである。

以上の四つの答によつてこの二乗種不生の問題を解釋するのが論註の所明である。

余は此處に於て、前章に於て二乗種不生の語義を釋した方法によつて曇鸞大師のこの所明を批判しやうといふ不遜の態度を持するものでない。何故なら全て宗教といふものは單なる學解ではないから。この會通によつて鸞師の淨土の思想を知り得ると共に、その思想背景の偶然ではなく、そこに發揮せられたる思想に共感して淨土往生思想の眞意を證顯すれば足りる。

そのことは漸次述べられるが、こゝに一言すれば鸞師の淨土は單に實報土をのべられるには非ずして當時、淨土教一般が恐らくは問題にしたであらう所の觀經の淨土觀が、彼の解釋の中に織り込まれてゐるといふことである。

第二に淨影寺の慧遠法師の二乗種不生の解釋を觀無量壽經義疏、卷末(大・三七・一八四・中)によつて窺はう。そこに二つの問答がある。

第一に問ふやう、往生論の中に、二乗種は往生を得ずと説く、然るに此觀經の中輩生の中に聲聞は往生すると説くではないか、と。

それに答へて、彌陀の淨土は小乗の行を修しては往生しない。臨終になつて大乘の菩提心を發し大乘の種を種タネえて初めて往生することが出来るのであると。

第二に問を發し、若し臨終に要す菩提心を發して方に往生することが出来るならば、彼の淨土へ生れて大乘の道果を證すべきものであるに、何故にたゞ小乗の果を得るのであるかと。

それに答へて、此の人は臨終に菩提心を發したのであるが、先に多く小乗を學んだから、彼の淨土に生れて苦、無常を聞きその本の解によつて小果を證したのである。然し終には大乘の心を發するのである。即ち、小果を得已つて小乗に住することなく必ず還た大乘に入るのであると。

是等の問答によつて知り得る如く、二乗種不生の種は種子とも解釋するが、その種子が生起するとかせぬとかいふことでなく、生を往生で理解するのであるから二乗種性では往生しないといふのである。曇鸞は彼の土(淨土)について種子の生不を中心としたのであるが、淨影は此の土に於て菩提心(大乘種)を發して往生するといふのである。

第三、天台、智者大師は觀無量壽佛經疏(大・三七・一九三・中)に解釋をしてゐるが、それは淨影と同様であるから略することゝしやう。

第四、善導大師は觀無量壽經疏、玄義分（大・三七・二五〇・中）の中、二乘種不生の一科を設けて説明して居られる。

即ち、二義を以てし、初は不定の始に就き、下輩の三人が佛名を稱して化佛、菩薩の來迎を蒙り彼の土に還り、華開く時に當つて、觀音の說法を聞き大乘心、即ち大乘種を生ずることを、二乘種（心）不生といふと、第二は小果の終に就いていふものであつて、即ち、十方の衆生の小乘の戒行を修して往生を願ふものは一も妨げなく悉く往生する。但し、彼の土に生れて先に小果を證し、證し已つて即ち轉じて大乘に向ふ、而して一轉し大乘に向へば去つて更に退いて二乗の心を生じない。これを二乘種不生といふのであると。

右の如く、善導の釋は種を心といひ、往生といふことは自明の理であつて問題でなく、彼の土に往生して上のこと、解釋する。

この曇鸞の釋と善導の釋との相違は、前者は大經を中心としてその報土についてのべ、後者は觀經を中心として化土の往生を釋したものであると眞宗<sup>⑩</sup>學者は會通する。

第五、慈恩大師、窺基は義林章、第七、佛土章（大・四五・三七〇・下）に於て「世親菩薩、淨土論云、女人、及根缺、二乘種不生、皆他受用土」といつてゐるが、聲聞種性、緣覺種性等の往生しない彌陀の安樂世界は勝妙であるから、十八圓滿の他受用土（報土）であるといふのである。

是の解釋に至つては凡夫も聖者も共に往生することを許す淨土教は全く破壊されることとなる。

### 五、智度論に於ける彌陀の淨土

前章に於て支那に於ける諸師の二乘種不生の解釋について一應敍し終つたから、ついでこの二乘種不生の思想の根源は何れにあるのか。智度論に於て如何に取り扱はれてゐるであらうか。

そこに説かれてゐる彌陀の淨土とは前來述べ來つた如く、簡單に説明し得られるものか。龍樹の安樂世界の解釋は如何であるか。その解釋によつて天親菩薩の淨土論の思想背景を見やうと思ふのである。

先づ、二乘種不生の第一に説かれてゐるのは放光般若經である。今、智度論を問題にするのであるから、その同本である小品般若經について述べることゝしやう。この羅什譯、摩訶般若波羅蜜經の夢行品、第十七、(放光般若經、夢中行品、大・八・九二)及び淨土品、第二十六(放光、建立品、大・八・一三五)等に二品合して三十六願が説かれてゐる。この般若經の本願思想と彌陀諸經典の本願思想の前後、影響等については他日に譲り、とにかく、この般若經の夢行品中の第二十五願(大・八・三四九・上)は、復、次に、須菩提よ、菩薩・摩訶薩は六波羅蜜を行するの時、衆生の三乘有るを見る。當に是の願を作すべし。我、佛と作るの時、我が國土の中の衆生をして二乘の名無く、純一大乘にして、乃至一切種智に近かしめむと。

かく、誓はれてゐる。こゝを釋してゐる智度論、卷第七十五卷に於て一々解釋がないから、その意味を明瞭にすることは出来ない。然し、淨土品の諸の本願を終つた後に、

須菩提よ、菩薩摩訶薩、應に是の如く佛國土を淨むべし。是の國土の中、乃至、三惡道の名無し亦、邪見、三毒、二乘、聲聞、辟支佛の名無し、耳に無常、苦、空の聲有るを聞かず、亦、我所無く、乃至、諸結使煩惱の名無く、亦、諸果の名を分別する無し、云々

等とあり、この經句は智論の九十三卷に一々説明せられてゐる。この中、是の國土に二乗の名無しといふについて二の問答をあげてゐる。

(一) 問曰、餘佛、有三乘教化豈獨劣耶、

答曰、佛出五濁惡世於一道分爲三乘

(二) 問曰、若爾阿彌陀佛、阿闍佛等不於五濁世生、何以復有三乘。

答曰、諸佛、初發心時、見諸佛以三乘度衆生。自發願言、我亦當以三乘度衆生。

(大・二五・七一・上)

この問答の眞意は、般若經所説の淨土は二乗の名なく純一大乗とすれば、諸佛に三乗の教化あるのに比して劣つてゐるわけではないかといふに對して、法華經、譬喻等(大・九・三・下)に説く「舍利佛以是因緣、當知諸佛方便力故、於一佛乘分別説三」の經意によつて、佛は穢土に於て一乗を分つて

三乘と説くものであつて、それは淨土と穢土との相違によるものといふ。

次に然らば、阿彌陀佛等は淨土に出生なさるゝに何故に三乘あるのかとの間に對し、又、法華經譬喻品(大・九・一一・中)に明す「華光如來、亦以三乘教化衆生、舍利弗、彼佛出時雖非惡世、以本願故説三乘法」の經意によつて、三乘を説くのは佛の本願によるものであるといふ。而してこの二問答の底を流るゝ意は淨土に於ても穢土に於ても三乘を説くのは分別、施設であるといふことであると思ふ。

思ふに清淨の佛國土に於ては本來、一乘であるべきであつて三乘あるのは施設、安布であると解するのが正しいのであるまいか。智度論、卷第三八(大・二五・三四〇・上)に清淨佛國に就て、

問曰、生<sup>スル</sup>他<sup>ニ</sup>方<sup>ハ</sup>佛<sup>ス</sup>國<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>爲<sup>ス</sup>是<sup>レ</sup>欲<sup>ト</sup>界、非<sup>レ</sup>欲<sup>ト</sup>界

答曰、他<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>佛<sup>ス</sup>國<sup>ニ</sup>、雜<sup>ラ</sup>惡<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>淨<sup>ク</sup>者<sup>ト</sup>、則<sup>チ</sup>名<sup>ス</sup>欲<sup>ト</sup>界、若<sup>シ</sup>清<sup>ク</sup>淨<sup>ク</sup>者<sup>ト</sup>則<sup>チ</sup>無<sup>ク</sup>三<sup>ノ</sup>惡<sup>ク</sup>道<sup>ト</sup>、三<sup>ノ</sup>毒<sup>ト</sup>乃<sup>チ</sup>至<sup>リ</sup>無<sup>ク</sup>三<sup>ノ</sup>毒<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>名<sup>ト</sup>、亦<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>乘<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>名<sup>ト</sup>、亦<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>女<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>一切<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>、皆<sup>リ</sup>有<sup>リ</sup>三<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>相<sup>ト</sup>無<sup>ク</sup>量<sup>ノ</sup>光<sup>ト</sup>明<sup>ト</sup>、常<sup>ニ</sup>照<sup>ル</sup>世<sup>ノ</sup>間<sup>ト</sup>、一<sup>ノ</sup>念<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>頃<sup>ト</sup>、作<sup>ル</sup>無<sup>ク</sup>量<sup>ノ</sup>身<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>と説いてゐる。

この中、大品般若の三十六願の中にも、別に無有女人の願はないけれども、清淨佛國に女人無しといふことは清淨佛國一般の通念であつたものであつて別に一願として誓はねばならぬものでなかつたものであらう。



又、根缺について特別に誓はれたものは魏譯、四十八願中に見出されないが、第十六願の離譏嫌名の願（無諸不善名の願）中に女人、根缺、二乗は包含せられるものであるし、第四の無有好醜の願、第二十一の三十二相の願あることによつて別願とする必要のないものである。従つて淨土論の大乗善根界の一偈は悲華經を敢て對象としたものであるか否か疑問とすべきものである。

龍樹菩薩の智度論に於ける阿彌陀佛の淨土の概念を精査することによつてかの淨土論は得らるゝものであらうことを強調したい。このことを特に高潮する所以のものは、我が眞宗宗學界に於てその傳統的立場から、法然上人がその著、選擇集、教相章に於て三經（無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經）一論（往生論）を以て往生淨土を明すの教とせられ給ふたことを奉じてゐるからである。この魏譯、大無量壽經によつて淨土論の造論となつたものとしてゐる。余は積極的にそれを證明し得ないけれども、單に大乘善根界の一偈の解釋によつて悲華經によつたであらうとすることは一應躊躇してよいことと思ふ。蓋し、無量壽經に諸本の異本があるけれども、魏譯、大無量壽經の第十八願の十方衆生が信樂によつて往生し得ると説いてゐる經典があるであらうか。二十四願（漢譯、吳譯）三十六願（宋譯）四十八願（魏譯、唐譯）四十九願（梵本）等互にその思想が影響し、整理、増補せられたことは認めねばならないが其等の經典は恐らくその發生地を異にし、傳承をそれぐ得てゐるものであるから、それぐ特異の存在價值を持つてゐるものと思惟する。阿彌陀佛の經典なるが故を

もつて會通的解釋のみすることは今後淨土教の研究をするもの、慎まねばならぬこと、思ふ。

尚、阿彌陀佛國に就て少しく述べるならば、大品般若經の往生品、第四(大、八・二五・下)に復次、舍利弗、有菩薩摩訶薩、得六神通、不生欲界、色界、無色界、從佛國至一佛國、供養、恭敬、尊重、讚歎、諸佛。舍利弗、有菩薩摩訶薩、遊戲神通、從一佛國至一佛國、所至到處無有聲聞、辟支佛乘、乃至無二乘之名、舍利弗、有菩薩摩訶薩、遊戲神通、從一佛國至一佛國、所至到處其壽無量

等の經句について智度論、卷三八(大・二五・三四・上)に釋してあるが、こゝに菩薩について、生身の菩薩と法身の菩薩との二種類をあげて説明し、已つて一の問答をあげてゐる。即ち、

問曰、菩薩法、應度衆生何以故但至清淨無量壽佛世界中

答曰、菩薩有二種、一者有慈悲心多爲衆生、至無佛法衆處讚嘆三寶之音、二者多集諸佛功德、至一乘清淨無量壽世界。

といつてゐる。この問答中の二種の菩薩の中後者のものは法身菩薩に相當する。又、この法身菩薩について阿鞞跋致地菩薩と次後の菩薩との二に分るが、法藏比丘は正しく次後菩薩に當り、阿鞞跋致地菩薩の初發心に便ち阿耨多羅三藐三菩提を得ると異り、發發心の時、般若波羅蜜と相應し、十方の清淨世界を觀じて自ら其の國土を莊嚴するのである。

而して此處にいふ一乗清淨無量壽佛世界とは阿彌陀佛の安樂世界をいふものならば一乗といふのに注意すべく、又、安樂世界を指すものでないにしても法身菩薩が神通遊戲する佛國は一乗清淨であるから、大無量壽經の往觀偈に見る如く、十方の菩薩衆が無量壽佛の所に往詣するのを見れば、安樂土も亦一乗清淨といつてもよいであらう。

それ故に、智度論、第三十四卷の阿彌陀佛、菩薩僧多く、聲聞僧は少しといふのは報土の究竟についていふものでなく、方便して施設してある邊について述べたものであらう。かく、釋することなく、二乗種不生を以て、窺基の如く、二乗種性のものは往生しないといふならば、凡夫往生を説く淨土教の眞意は全く没却せられ、十方衆生の本願は徒設となるであらう。凡夫、聖者各々その無量壽佛を念することによつて淨土に往生し各々その果報を得る。然もそれ等の人々が畢竟は唯一乘に攝化せられるのであるが、しばらく、善巧方便して三乗が分別し顯示されてゐるに過ぎないものである。即ち、智度論卷第九十三(大・二五・七四・上)には「阿羅漢は淨佛國土に往かば法性身を受く」といひ、「佛法は五不思議の中第一なり、漏盡阿羅漢は還た佛と作る」といふ如く、かの第三十四卷の文は方便施設につき、淨土論は眞實に約して説かれてゐるものであつて一見矛盾ある説相となつてゐるものと思惟する。

因に智度論、卷三四(大・二五・三〇九・上)には、「又如阿彌陀世界中諸菩薩、身光照十萬由旬」をいひ、

卷三三二（大・五・三〇二・中）に、「阿彌陀佛壽命無量、光明千萬億由旬、無量劫度衆生」といふ如き說相は如何なる經本によるものか、注意してよいものであらう。

### 六、無量壽經の所說について

大無量壽經の序品、大經會座の菩薩の徳を嘆ずる條下に、菩薩は聲聞緣覺の地を超越し、空、無相、無願の三昧を得たり。善く方便を立して三乘を顯示し、此の中下（緣覺と聲聞）に於て而も滅度を現すれども亦、所作無く、亦、所有無し、起せず、滅せず、平等法を得たり、と説いてゐるが、法藏菩薩の諸願も亦、これ等の菩薩と同じく方便施設して三乘を顯示したものであると思ふ。

従つて、その安樂國土の人莊嚴を説いては、阿難<sup>⑩</sup>に、彼の佛の國土に諸の往生する者は、是の如く清淨の色身、諸の妙音聲、神通の功德を具足すると略して明し。

其の諸の聲聞、菩薩、天、人は智慧は高明して神通は洞達せり、咸同じく一類にして形に異狀無し。但し、餘方に順するが故に天、人の名あり。

顔貌は端正にして世に超えて希有なり。容色は微妙にして天に非ず人に非ず、皆、自然、虛無の身、無極の體を受けたり。

と廣説してあり、香月院科文によれば、以上は涅槃の妙果を明し、前者は所證の平等を示し、後者は身體の精妙を明すといふは當を得てゐるといふべきものと思ふ。即ち、國の人（聲聞・菩薩）天は

平等一味であつて、形に異りなく、たゞ餘方に順據して天といひ、人と差別するのであるといふのである。

これ淨土論の大乗善根界は、等しく(平等一味)譏嫌之名無しといふに等しいものであると解することは敢て不當でなからう。而も、それ等の天人の容色端正であつて虚無の身、無極の體といふに至つては根缺不生の偈句とも相應するであらう。

而して天、人衆は咸同一類といひつゝも、他方、聲聞衆の身光を一尋といひ、菩薩を百由旬、觀世音、大勢至の二大士は普く三千大千世界を照すといふ如く、そこに差別を見るのである。又、衆生往生を明す下卷に至りては、その彌陀の淨土に往生すれば、悉く正定聚であるいひ、その正定聚について第十八願、念佛往生の機と諸行往生の機とその果報を異にして説かれてゐる。かく、平等に即して差別を施設して行く所に淨土教の眞意義が發揮せられてゐる様に思ふ。

## 七、結 語

以上種々論じたことであるが、二乗種不生といふ語義は二乗種性のものは淨土に往生しないといふことであるが、それは施設、安立を離れた眞實報土の説明であつて、それをそのまま理解しては慈恩大師の如く、或は經典史家の陥りたる大なる過失に墮するものである。淨土の諸經論の一見矛盾したる如き所説はそれは施設についていはれてゐるものであつて何等相違するものと思はれない。

い。歴史的研究も非常な重要な研究方法であるが、深く淨土經は淨土教の教相を深く研究して、なくてはならない。この二乘種不生の思想の如きも龍樹菩薩時代に既に成立し得るものであつて悲華經と限ることは未だ論證が早すぎると思惟するものである。又、淨土教の傳統的解釋も確に會通ではあるが、然も、かく會通せねばならなかつた時代思想の發展を考慮すると、それは解學としては失敗に終るけれども、行學としては大なる意味を持つたものとなり、そこに淨土教の發展を見、宗教として生命の躍動してゐることを見逃し得ない。そこに宗學としての信仰の妙味、鬱然として湧くをおぼえしめる。

① 無量壽經優婆塞提舍願生偈、婆藪槃豆菩薩造 元魏、天竺三藏、菩提流支譯(大、二六、二三一、上) 昭和校訂 眞宗七祖聖教、頁二二、

② 同、(大、二六、二三二、上)

③ 無量壽經優婆塞提舍願生偈註、卷上、曇鸞註解(大、四〇、八三〇、下) 昭和校訂 眞宗七祖聖教、頁四九、

④ 無量壽經、卷上、(大、一一、二六八、上)

平等覺經、第十二願、(大、一一、二八一、中)

我作佛時、我國諸弟子、令八方上下各千億佛國中諸天人民顛動之類、作緣一覺、大弟子、皆禪一心、共數我國中諸弟子、住至百億劫、無能數者、不爾者、我不作佛。

大阿彌陀經、第二十願(大、一一、三〇二、上)

使其作佛時、命八方上下各千億佛國中、諸天人民娟飛顛動之類、皆令作辟支佛阿羅漢、皆坐禪一心、共欲計數我國中、諸菩薩、阿羅漢、知有幾千億萬人、皆令有能知數者、得是願乃作佛、不得是願、終不作佛。

如來會、第十四願(大、一一、九三、下)

若我成佛、國中聲聞無有知其數者、假使三千大千世界滿中有情及諸緣覺、於百千歲、盡其智算亦不能知、若有知者、不取正覺、

莊嚴經、第九願(大、一二、三一九、中)

世尊、我得菩提成正覺已、所有衆生令生我刹、雖住聲聞緣覺之位、往百千俱胝那由他寶刹之內、徧作佛事、悉皆令得阿耨多羅三藐三菩提、

梵本和譯、第十二願(梵藏和英合璧淨土三部經、三三)

世尊、我れ無上なる正等覺を證得せる後、云何なる有情も、設し其佛國の諸聲聞の數を算し得べくんば、假令ひ三千大千(世界)に屬する一切の諸有情は獨覺となりて、百千俱胝那由他劫波の間に計算しつゝも、其佛國の諸聲聞の數を算し得べくんば、我はその間に無上なる正等覺を證得せざるべし。

以上は魏譯、第十四願に相當する異譯、諸經の願文を南條博士の「支那五譯對照 梵文和譯佛說無量壽經」に準じて列舉したものである。

これが、聲聞無數の願といはれるのであるが、吳譯、大阿彌陀經に見るが如く、諸の菩薩、及び阿羅漢の無數が並列同等に誓はれてゐること、宋譯、莊嚴經はその願文の相當を見れば徧作佛事の願として特異のものとして扱ふべきもの、如く思はれる。

⑤ 無量壽經、卷上(大、一二、二七〇、中)

平等覺經、卷二、(佛語阿難……皆豫知之)(大、一二、二八九上——二九〇、上)

大阿彌陀經、卷上、佛告阿難……皆豫知之(大、一二、三〇七、中——三〇八、中)

如來會、復次阿難、彼無量壽如來、諸聲聞衆不可稱量……諸菩薩摩訶薩衆亦復如是、非以算計所能知、(大、一二、九六、上)

莊嚴經、卷中、復次阿難、無量壽如來……有如是無量不可算數聲聞弟子、(大、一二、三二二、上)

梵本和譯、第十三章、又阿難陀、彼無量光如來聲聞衆は無量なり……是の如く彼世尊の聲聞衆は無邊無際なり、故に唯だ無量無數といふ數に墮するのみ(淨土三部經、七三——七四)

⑥ 十住毘婆沙論、卷五、易行品(大、二六、四三、中)

淨土論に於ける二乘種不生に就て

尚、龍樹菩薩のこの易行品の三十行の彌陀讚については、望月信亨著「淨土教の起源及發達」五六七頁以下に、平等覺經二十四願經によりて述べられたものならんことを指摘し、この經の龍樹時代に既に印度に行はれたものであることを説明して居らる。

⑦ 智度論、卷第三十四(大、二五、三一、下)

⑧ 悲華經、卷第三(大、三、一八四、中)

大乘悲分陀利經、卷第三(大、三、二五〇)

令我菩薩僧衆無數、聲聞緣覺無能數者、除薩婆若智、

Kaṃṣā-paṇḍitaṃ. by Gaṇeśa chandra das. 1898. calcutta. p. 95.

(43). Apameyasa me bodhisattvasaṃghāḥ syāḥ śāvakapṛatyekabuddhavarjito yama śakyam gaurītiṃ. anyatra sāvra-jāna jānema.

⑨ 悲華經、卷第三(大、三、一八四、下)

⑩ 悲華經の願文の数へ方は、國譯一切經、經集部第五、に依る。

⑪ 淨土論註顯深義記、二、六四左

⑫ 勝鬘經、一乘章、第五、(大、一、二、二二〇、上)

煩惱有二種、何等爲二、謂住地煩惱、及起煩惱、住地有四種、何等爲四、謂見一處住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地、此四種住地、生一切起煩惱、起者剎那心剎那相應、世尊、心不相應、無始無明住地、世尊、此四住地力、一切上煩惱依種、比無明住地、算數譬喻所不能及、……………

阿羅漢、辟支佛、斷四種住地、無漏不盡、不得自在力、亦不作證、無漏不盡者即是無明住地、

⑬ 法華經、化城喻品、第七(大、九、二五、下)

我滅度後、復有弟子、不聞是經、不知不覺菩薩所行、自於所得功德、生滅度想、當入涅槃、我於餘國作佛、更有異名、是人雖生滅度之想、入於涅槃。而於彼土、求佛智慧、得聞是經、唯、以佛乘而得滅度、更無餘乘、除諸如來方便說法。智度論、卷第九三(大、二五、七一、上)

⑭ 得阿羅漢時、三界諸漏因緣盡、更不復生三界、有淨佛土、出於三界、乃至無煩惱之名、於是國土佛所、聞法華經、具足



佛道、

⑮

香月院、淨土論註講述、卷三、頁、八左—九左—時ニ、コ、ニーノ要論アリ、下(答、第四ライフ)ノ二乘種不生ノ御釋ノ處ニハ他方ノ聲聞、緣覺カ安樂淨土ヘ來生スルノハ、ミナノ、菩薩ニナリテ生スル、二乗テハ生セヌトイフ御釋アリ、サテ第三ノ問答(問答決疑ノ第三)ヘイタリテ彌陀ノ本願不思議力テ聲聞カ往生スルトイフ處ニハ無上菩提心ヲ起シテ往生ストノ給フ。爾ルニ今コ、テ法華ト智論トノ意ニヨリテノ給フハソウツナイ、無餘涅槃ノ聲聞カ聲聞ノ形テ淨土ヘ生シテ、サテ其淨土テ釋迦カ名ヲカヘテ顯レテ說法シ給フヲキ、テ、ソノトキ初テ發心シテ大乘ヘ轉向スルトイフ說ナリ、ソレヲコ、ヘ舉ルナリ。

爾ハ鸞師、コノ淨土ヲ彌陀ノ淨土トスルトキハ、先彌陀ノ淨土ヘ生スルマテハ聲聞テ生レオハリテ初テ大乘ヘ轉向スルト、コレ次下トハ大違ヒナリ。

爾ニ、コレヲ云何ト論シタル末疏ナシ。タトヒ此相違ト云コトヲ知りテモ西、鎮ノ他流テハ會通ハナラヌ。今家ノ祖訓ニヨラネハ一向ウコカヌ處ナリ。我祖ハ彌陀ノ淨土ニ眞化二土ヲ分ツ。コレテナケレハ此論註ハ動かカヌ。

下ノ二乘種不生ノ御釋ハ淨土論ノ正所明タル眞實報土ヘ往生スルコトヲノ玉フ。ソコテ聲聞緣覺ノ貌テハ生レラレヌ。此世ニテ他力ノ信心ヲウル處カ横超ノ菩提心ニシテ早ヤ現生ニテ等覺ノ大士ト肩ヲ比ヘ不退ノ位ニ任ス。ソコテ眞實報土ヘ生ル、トキハ初カラ因門ヲ以テトレハコレ菩薩、果門ヲ以テ取レハ是レ佛ニナリテ生レル。聲聞ノ緣覺ノト云貌ヲサセテハカゲサシモナラヌ、眞實報土、ソコテ二乘種不生ト說タトイフ鸞師ノ御釋ナリ。

今、コ、ニ法華、智論ニヨリテ無餘涅槃ニ入タ聲聞カ三界ノ外ノ淨土ヘ生スルト云ハ吾祖ノ分タセラル方便化土ノコトナリ。即、コレカ觀經ノ中品生ノ說相ト同ナリ。阿羅漢ノ聖者カ、カネテ修スル處ノ小乘ノ行ヲ回向シテ生レタ所カ方便化土ナリ。ソノ化土ヘ生シテ後、觀音大士ノ說法ニヨリテ大菩提心ヲ起シテ眞實報土ヘ轉入スルト云カ觀經ノ說相ナリ。法華經ニ釋迦我レ餘國ニ於テ名ヲカヘテ法華ヲ說テ一佛乘ニ入ラシメントノ給フハ、今家ヨリイヘハ釋迦ハ本ト彌陀ノ化身ユヘニ、釋迦ノ名ヲカヘルトハ、本ヘモトリテ彌陀トナルコトナリ。又、釋迦、法華會上テノ給フ故ニ法華ヲ說クトハノ給ヘトモ實ハ觀音ノ說法ノコトナリ。今ノ論註ノ文ハ方便化土ノ往生ヲ下タ意ニ持テノ御釋故、下ノ御釋ト相違ニ非ス。サレトモ、爰ニ心得コトアリ、全體、今、鸞師ノ正ク釋スル處ヘ眞實報土ノ大義門功德テ、化土ノ往生ノコトハ入用ニナイ。ケレトモ、コ、ハ聖道門ノ人師ヘ對シテ向フノ持タ捧テ聲聞ノ淨土ヘ生スルコトヲノ給フ所ユヘニコ、ノ明シ方ヲミ

淨土論に於ける二乘種不生に就て

ルヘシ。タ、彌陀ノ淨土ヘ他方ノ聲聞ノ來生アリトイフハカクテ外ノコトハノ給ハヌ。ソレユヘニ眞實報土トモイハズ、化土トモイハズ、オンボリトノ給フ。コノ一段ノ所詮ナリ。」

是の所論の要領は承認せらるべきものであつて、その炯眼以て後學の服すべきものと信ずる。

(16) 香月院、淨土論註講述、卷三、頁一二右以下。

佐々木月樵全集印度支那日本淨土教史、第五章、龍樹の淨土教、頁一一四中にこの文を以て彌陀の淨土の念佛得益の文として引證して居られる。

(15) 無量壽經、卷上(大、一三、二六六、中)望月博士「淨教の起原及其發達」(頁三二二以下)に、この菩薩、歎徳文を以て覺賢、寶雲等譯者の附加とするが、この説には承服しかれる。「專修學報」、第一號、頁二六四以下北川賢淨氏、康僧鑑譯と稱せらるゝ現行無量壽經の譯者について、この望月氏所論を否定して得られる。

(19) 無量壽經、卷上(大、一二、二七一、中)この經句を以て、第三願、設我得佛、國中人天、不悉眞金色者、不取正覺、の成就文とする。

無量壽經、卷上(大、一二、二七一、下) 其諸聲聞以下故有天人之名、の經句を、第三十五願、女人成佛の願成就、顏貌端正以下無極之體の經句を第四願、無有好醜の願成就文とする。南條博士、支那五譯對照梵文和譯佛說無量壽經、頁一八〇、參照、然し、前者を以て女人成就の願成就とすることはこの文の當相より見て妥當でないと思ふ。

(20) 無量壽經、卷上(大、一二、二七一、下) 其諸聲聞以下故有天人之名、の經句を、第三十五願、女人成佛の願成就、顏貌端正以下無極之體の經句を第四願、無有好醜の願成就文とする。南條博士、支那五譯對照梵文和譯佛說無量壽經、頁一八〇、參照、然し、前者を以て女人成就の願成就とすることはこの文の當相より見て妥當でないと思ふ。